



TITLE:

<批評・紹介> 王毓銓著「前漢中央政府の機構」

AUTHOR(S):

川勝, 義雄

CITATION:

川勝, 義雄. <批評・紹介> 王毓銓著「前漢中央政府の機構」. 東洋史研究 1951, 11(2): 178-181

ISSUE DATE:

1951-03-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138915>

RIGHT:

Wang Yü-ch'üan: An Outline of the Central
Government of the Former Han Dynasty.

(Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 12, No. 1
& No. 2, June, 1949.)

本書は前漢中央政府を構成する重要な各職員の職掌を實證的に確定し、且つそれらの機構と權力との關係を解明したものであるが、その叙述が單に官僚機構の靜的固定的説明にとどまらず、權力の推移と共に起る機構内部の動的な變化をも叙述している點において、我々に示唆するところがあるように思う。以下その内容を紹介したい。

先づ一の序論においては、前漢中央政府の機構は秦の中央集權的官僚獨裁制を受けついでいること、そしてそれが半獨立的封建王國の支配權を奪つて自己を擴大強化し、前二世紀末にはその頂點に達すること、かくて廣絶な地域と龐大な民衆を統治する必要上、行政機構も亦大規模なものとなること、及びその官僚機構は右制による階層的な構造をもつことが述べられている。

二の「皇帝」においては、皇帝の絶對的權威の説明にすべての叙述の重點が置かれている。皇帝の權威を絶對化する意識的な努力として高祖劉邦の神聖なる出自の傳説、臣下との間に設定された嚴格な宮廷儀禮の障壁が述べられ、武帝の封禪によつて天命受領者としての漢帝の正當性が確認されたという。然し皇帝の眞の力はその統禦する政治的軍事的な諸力から出ると云い、具體的には租税と勞役——それによつて一は行政諸經費をまかない、他は軍隊と土木工事に提供される——がその基礎をなすと説かれる。そして皇帝は政府職員の任免權をもち、唯一の立法者として臣下の絶對服従を強要したという。皇帝權

の確立と基礎とに關するより突きつめた把握はこの論文からは得られない。次の三以下において本格的に表われるところの、官僚機構の究明という本論文の立場からして、その階層の頂點に立つものとして、その限りにおいてのみ皇帝の絶對的存在が説かれていゝと考へられる。

三の「臺閣」(Imperial Cabinet)はA丞相・B御史大夫・C他の大臣・の三節に分たれ、その各々について職掌が述べられてゐる。職責をより完全に認識する方法として、單に漢書百官公卿表のみならず、(1)丞相の場合には史記漢書に記載せられた多くの丞相の傳記、(2)無能なる丞相を罷免する皇帝の命令、(3)紀元後一二世紀に書かれた漢の制度に關する書——漢舊儀・漢官儀等——を史料として用いてゐる。この方法は丞相以外の官僚を考察する際にもすべて用ゐられる。

かくして得られた結果として、丞相は先づ官吏の推薦權をもち、六百石以下の官吏は皇帝にはかることなく任命し得たが、その反面これらの官吏の行爲に責任を持たねばならなかつた。丞相屬官たる司直がその監視に使われる。丞相は又國家財政及び軍隊への給與に責任をもつ。更にそれは帝國の重要な政治的・軍事的・宗教的な問題を討議すべき廷議を司會し、その結果を要約して皇帝に報告した。地方行政一般に關しても彼は責任をもつ。その官廳には土地簿・戶籍簿・帝國地圖、地方からの收穫報告・財政報告等が置かれ、年度末に、各地方から年間報告を提出すべく使者が送られると、そのコピーは丞相府に届けられる。これによつて丞相は地方行政官の等級を定める等々。總じて丞相は皇帝の補佐者であり、官僚組織の頭に立つと説かれてゐる。

御史大夫はいはゞ副總理ともいふべきもので、重要問題が起つたときは、丞相はこれと討議する。がその重要な職務は行政官の監督であ

り、その限りにおいての副總理である。年間報告に來る地方の使者を彼は副總理として引見し、その離京に際しては丞相と同じく諭告を與える。がそれは大體地方行政の紀律に關したものである。御史大夫の監督は丞相にさへも、更に皇宮内に官廳をもつ御史中丞を通じて皇帝側近者にまでも及ぶ。官吏の監督と共にもう一つの重要な職務は、國家の重要事件に關する詔勅を丞相府に傳達し、又高官からの上奏文を皇帝に呈上するという傳達官の役割である。それは宮廷内のその屬官たる御史中丞との協同による。御史中丞はその他地方監察官たる部刺史の統轄をもなす。御史大夫の官職は右の如く宮廷外と宮廷内との二つの官廳から成ることが注意されねばならぬ。皇帝側近者としての御史中丞が後に勢力を得てくることも指摘されてゐる。

Cの他の大臣の中、先づ太尉があげられるが、これは三公の中に數えられはするが、則闕の官として右の二つと同じ重要性は持たぬといふ。次に九卿の中、太常は政府において祭祠を掌るが、それと共に賢良・文學等の官吏候補者に對して政府に於て任官試験を行うこと、尙書が史を採用する前に、太常の屬官たる太史令が說文解字の暗記について候補者を試みることが注意される。然し太常の最も重要な職務は太學の管理であつた。過去現在のすべてに通じ、皇帝の如何なる諮問にも答へ得るとされ、廷議にも列席した博士達が太常の下に置かれていた。そして太學生の選定權をもち、その官吏への採用に關與した。次に光祿勳は、官吏候補者として宮殿内の警衛に當つてゐた「郎」を監督し、毎年それを試験し等級をつけた。郎は側近者として政治問題に意見具申を求められるという有利な地位にあつたことが注意される。光祿大夫・諫大夫等、光祿勳の屬官も宮廷内にあつて皇帝に對する忠言者という役目をもつていたのである。九卿のその他の官職につ

いては、一般に知られていることが簡単に述べられているにすぎぬ。が唯、少府の屬官たる尙書と宦官とは、後に皇帝が側近者を重用するにつれて丞相をも凌ぐ地位を得ることが注意されている。

四は「司隸校尉と部刺史」と題される。それは直接中央政府には屬さぬが、中央集權的政治を効果あらしめるには寧ろ重大な役割を演ずる。龐大な官僚機構を監察する機關としては既に御史府と司直とが存した。然しそれは何れも宮殿外の政府に屬し、皇帝側近ではない。最初は囚人勞働者の指揮官にすぎなかつた司隸校尉が、公卿以下すべての人を監察調査すべき勅旨を受け、丞相もそれに干渉し得ざる天子直屬の大臣——奉使命大夫——となつたのは、武帝末年皇太子の謀反事件に始まる。司隸校尉がかくの如き強權を握つたのは、僅か四十五年許りであつて、後は皇帝權力の直接の背景を失うが、兎に角強權を握れる司隸校尉の存在は、監察權が政府より皇帝自身の手に移められ、獨裁が強化されたことを意味する。地方官の監察には武帝時代以後部刺史が當る。それは王國をも監督した。そしてそれは宮廷内に官廳をもつ御史中丞——畢竟皇帝側近者である——に屬する。部刺史を御史大夫又は丞相に屬せしめず、御史中丞に屬せしめた事は、地方行政の統轄を皇帝——少くとも武帝——自身の手に移めたことに外ならぬ。前漢において最も獨裁的な時代に、この二つの官職が設置されたことは、注目すべきことであると述べられている。

五の「皇帝とその臺閣」においては、皇帝は絶對的權力をもつといえ、それにはやはり限界があつたこと、その最も大きな障礙は皇帝自身の設立した臺閣であつたことが述べられる。皇帝の權力は臺閣を通じてのみ効果的に行使されうるにも拘わらず、皇帝の意志と政府首班たる丞相の意志とは屢々齟齬した。高祖及び殊に武帝の如き強烈な

個性が皇帝であつたとき、兩者の衝突が多く見られる。かくて一方皇帝は丞相をはじめ諸大臣に對する不信を増し、他方大臣の側からは皇帝權を制限せんと試みをなす。前者の例として先に述べた司隸校尉等の制度、及び次の六に見られる大將軍等の側近者重用があげられ、後者の例として、儒家的政治理念——有德者による政治という思想と、災異說——天人相關の思想とによつて、皇帝の政治に對してのみならず、その人格に對しても嚴しく批判したことをあげている。

六の「政權の外廷（臺閣）より内廷への推移」においては、以上の如き皇帝と外廷との對立に應ずる手段として、先づ攝政府が武帝の末年に創設され、以後半永久的の制定となつたこと、そしてこれが臺閣の權力にとつて代つたことを述べている。これは大司馬大將軍の稱號をもつ將軍によつて掌握されるが、それはもはや單なる軍隊指揮官ではなく、官僚階層においては丞相より下にあつたが、皇帝直屬として無限の權力をもつた。この地位は低い出自、或は外國生れの忠節なる側近者、又は皇帝の姻戚に與えられる。彼らは家柄や學問的素養に頼らず、唯々皇帝の寵によつてのみ地位を得、従つて絶えざる奉公を示さねばならなかつた。獨裁君主が大臣に不信を懷いたとき、信任はこれらの人に向けられざるを得なかつた。この結果丞相御史大夫は國家の重大事件に關する決定を左右しうる力を失ひ、單なる行政官になり下つた代りに、皇帝側近者が國家の中核となり、政府は實中内廷に移ることとなつたと説明されている。

かゝる傾向を示すも一つの現象は尙書の地位の向上である。もと少府の一屬官にすぎなかつた尙書は、その仕事は宮中においてなされ、且つ詔勅及び皇帝の答書の準備に與つたため、屢々政治問題について皇帝の諮問をうけた。その地位はこうして次第に政治的重要性を荷つ

てくる。國家の公文書一般がその手を通るようになる、もはやその地位は全官廳の基礎とまでいわれるものとなる。漢舊儀及び漢官儀に記されている尙書職の構成、即ち常侍曹・二千石曹・戶曹・客曹・更に三公曹の組織は、それ自體一個の完全なる政府の構成をもち、而も正規の政府の上に立つ超政府の形をとる。そして大將軍がこれの監督を委ねられることとなつた。これに加えて皇帝との個人的關係による宦官の權力掌握も見られる。何れもそれらは政權の宮中への集中、或は宮中の一黨への推移を意味すると述べられている。

次に七では「廷議」の構成と機能がのべられている。それは國家の重要政策に關する審議機關であり、その權威は丞相や攝政の權威よりも高い。前漢後期には側近者のみの内廷會議が招集されたが、然し最も肝要なる問題については通常内廷外廷兩者の協同の會議が招集された。尤もここに注意すべきは、それが立法機關でなく、唯皇帝に對して勸告をなしうる機關にすぎぬことであり、まして會議參加者が自由に且つ大膽に意見を吐露しえたか否か疑問なるにおいては、その機能と權威の過大評價は慎まらるべきことであらう。がとにかく廷議の存在は、大臣が皇帝權を抑制するに當つての有力な機能を果たしたことは疑問の餘地がないという。

八の「指導的大臣の任命」においては、丞相及び御史大夫の任官を手がかりとして、官位の昇進について考察され、結局先任順に次第に高位へ昇進することが明かにされている。そして前漢においては官位の昇進、更には最高地位への到達は、専ら行政官としての材幹により、家柄に左右される點の少いことが丞相の出自の統計的調査から明かにされている。

以上本論文において、前漢中央政府の構造は官僚機構に支えられた

獨裁制として把えられる。そして皇帝の獨裁意欲と政府官僚との對立緊張という二本の糸のからみ合いの中に政治史が展開され、大將軍・尙書・宦官等はこの間において浮沈してゆく。かくて官僚機構そのものが内部に若干數の派閥を含みつゝ、それらの勢力均衡の上に、或は一黨の制壓の上に運営されてゆくと結論される。尙、この結論の部分（九）には、前漢の官僚が、決して純粹な儒家的教養にもとづいて政治にたずさわつたのでなく、儒教が唯政治的術策の粉飾に使われたにすぎなかつたことが翟方進を例として附言されている。

以上において王毓銓氏の近業を忠實に紹介した積りである。ことに於いて取扱われる中心課題は、前漢中央政府の機構であつて、その政治力ではない。機構の確定及びその實際の運用に關するかかる基礎的な研究に於ては、その叙述に或る程度の平板さを免れないであらう。然し筆者が本論文を讀過する間に、屢々啓發され、又新鮮さを感じたのは、單に歐文の與える近代的感覺のみによるのであらうか。

（川勝義雄）